
君と過ごした季節 - 思い出の欠片 -

浦島二太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と過ごした季節 - 思い出の欠片 -

【Nコード】

N5867H

【作者名】

浦島二太郎

【あらすじ】

大切な人を失った僕の時間は止まったまま。思い出を遡るように傍らにいた彼女へ語りかける。

（前書き）

君は本当に幸せだったのだろうか。

記憶の中の君は変わらない笑顔で僕に微笑みかける。

第一章「記憶」

【カザハナ】

久しぶりに仕事のない日曜日。
いつもならどこかふらつと出掛けているはずだけどね。
窓から外をぼーっと眺めているだけ。

昼前に、

窓の外に白く降ってくるものが見えた。

「ん？」

「雪かな？」

窓を開けて外を見渡す。

白い雪の片鱗が静かに舞うように風にながされていった。

「風花っていうのよ」

耳元で君の囁く声がした。

南国生まれの僕が生まれて初めてそれを見たときに君が教えてくれたね。

僕の隣でその白い花びらを両手で受け止めるような素振りをしながら。

どこから流れてきたのか。

空の青さと風花の白。

そのキレイなコントラストに、

心を動かされたあの日のことを思い出した。

傍らにいた君の笑顔が僕の頭を過ぎった。

【ナミダ】

今朝目覚ましにではなく君に起こされた。
と言うか、

夢を見ただけなんだけどさ。

傍らにいた君。

それは亡くなった僕の妻。

凍てついた俺の心を少しだけとかしてくれた相手。

クリスマスローズは彼女のために植えた。

「玄関前にいっぱい咲いていたら」

「冬は素敵だし」

「夏は葉っぱの緑が映えるよね」

結局、君はクリスマスローズの咲くのを見ることはなかった。

花を眺めながらこの家の玄関をくぐることはなかった。

ここに引越してきて一年。

その半分を病院のベッドで過ごし、そのまま。

「こっちにはこの花を植えましょう」

「向こうにはこれを」

庭先で軍手をつけて花の苗を並べる君の後ろ姿。

「ね、どうキレイでしょ」

振り向いた彼女の笑顔に笑いながら頷く僕。

バカみたいな、そんな夢。

急に涙が溢れだし、現実へと引き戻された。

時計を見ると6時を少し回った時間。

僕はぼーっとしながら頬を伝う涙の感触を静かに感じていた。

何とも目覚めの悪い朝だった。

【アーチ】

玄関先にグリーンのアーチがある。

「アーチに薔薇の花を這わせて」

「薔薇のアーチをくぐって家を出入りたいわね」

そんな君の言葉に僕は玄関先にアーチを作った。

でも君は薔薇の花を這わすこともそのアーチをくぐることもなかった。

先週、ふと。

薔薇の花を探しに出掛けた。

薔薇のアーチをくぐることを楽しみにしていた君はいないけれど、寂しそうなアーチに薔薇の花を這わせてあげようと思った。

もしかしたら薔薇のアーチをくぐるたびに君を思い出して、少しだけ安らげるかも知れない。

忘れることが出来ないなら、

薔薇のアーチをくぐるたびに君のことを思い出そう。

第二章「約束」

【リング】

「煙草、吸いすぎないでね」

「あの子をお願い」

死ぬ間際に彼女がいった言葉。

誰に対しての言葉だったのか。

でも、僕は煙草を減らしたよ。

そしてあの子も元気に育っているよ。

「僕の子なのに」

誰よりもあの子を愛してくれた。

大丈夫、

あの子は今も君だけを母親だと思っているよ。

ホンの数年で君はあの子に一生分の愛を捧げてくれたんだね。

「母親はもう要らない」

思春期になって生意気なことも言うようになった。

「わたしの母親はあの人だけだから」

あの子がいう「あの人」って君のこと。

そして、もう5年も経つというのに、

僕の指には君からのリングがまだぼんやりと輝いているよ。

【シオカゼ】

「あなたは、どんなときに」

「わたしと過ごした時間を思い出すのかな」

横殴りの風に君の声が流されていった。

その微かに聞こえた君の声にふと僕は君の横顔に目を向ける。

潮風が君の長い髪を撫で、君の頬は涙に光っていた。

僕は立ち上がってジーンズの砂を払って君に手を差し延べた。

「また来よう」

君の手を握りしめてそう囁いた僕。

僕の言葉に君は笑って頷いたけど、その約束が果たせないことを知っていたのか。

冬の海はどこかしら寂しげで、

ただ波の音だけが優しく二人を包み込んでいた。

あんな小雨まじりの日にどうして冬の海なんか眺めに行っただんころう。

きつと気紛れに君が、

「海が見たい」

そんなことを言ったからかも知れない。

風に飛ばされていった君の言葉を思い出しながら、僕は一人で海を眺めている。

【サヨナラ】

「さよなら」

それは僕が嫌いな言葉。

だから僕は誰かと別れるときは、

「じゃ、またね」

と、言葉を掛ける。

「またね」

漠然とした次の約束、決して終わりじゃない。

次がいつになるかはわからないけれど、でもまたいつか必ず会えるはず。

君が亡くなったとき僕は静かに、

「じゃ、またね」

そう呟いた。

あれからどれくらい経ったのがろうか。

今日は君の命日。

「またね」

いつになるかわからないけど、君と交わした再会の約束。

僕はまだ果たせないでいる。

（後書き）

幾つかの短い、本当に短い話をつなげて一つの物語にしてみました。

一人称で読みやすくまとめてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5867h/>

君と過ごした季節 - 思い出の欠片 -

2011年2月2日15時22分発行